

鬼と仏と

住友を破壊した男・伊庭貞剛

江上 剛

第六回

第六章 本店支配人

1

なぜ、命を懸けて国家のために尽くそうと誓っていたのに、官を辞することになってしまったのか。

貞剛は、住友本店の執務室で自問自答していた。

一八七九年（明治十二年）二月、三十二歳での人生の転機だった。同年五月には住友本店支配人に任じられ、二等社員から一等社員にもなった。

叔父の広瀬宰平のお陰で厚遇されていると感じる。いささか給料

も上がり、梅子の表情が和らいだのには安心したのだが、あまり厚遇されすぎると、他の社員のやっかみを受け、居心地が悪くなってしまうのではないかと懸念しないでもない。

——お前が自分の甥だから住友本店支配人にするわけではない。官の世界で出世したその能力は、今の住友にはない。これから多くの官出身者を迎え入れたいと考えている。そのための試金石だと思ってくれ。

宰平の言い分だが、それをそのまま素直に受け取るわけにはいかないだろう。

宰平は、思っていた以上に住友で力がある。

一八七七年（明治十年）二月十四日に、宰平は十二代当主友親ともちかによって総理代人に任じられ、事業に関する一切の権限を委任されることになった。この職務は、後に総理事と改称されるが、所有と経営の分離ということである。

友親は住友の所有者、いわゆるオーナーであるが、経営の実務一切は宰平が執り仕切ることになる。

オーナーである友親は、君臨すれども統治せずという立場になったわけだが、これは住友が近代的な経営形態に移行する第一歩だった。

宰平は、住友の経営を近代化するにあたって古くからいる幹部た

ちを排して外部から人材を採用し、また若く優秀な店員（社員）を抜擢ばってきしようとしていた。貞剛は、その第一号というわけだ。

——宰平は、実力が他の使用人とくらべて抜きんでているため総理代人になったのだが、自分はそうではない。まだ住友に何も貢献していないし、実力を示せたわけではない。ただ官の世界でそれなりに出世を遂げたというだけで、それが住友の役に立つかどうかはこれからの働きにかかっている。謙虚でないといけない。叔父宰平の虎の威を借る狐にはならぬように、あるいはそう見られぬように振る舞いを律せねばなるまい。

貞剛は、官を辞するにあたって帰郷したときに、師である西川吉輔よしに相談をした。

吉輔は、貞剛に国家という観念を教授し、官の道に誘ってくれた恩人だ。その道を辞する際に相談をするのは当然のことである。

吉輔は、維新後は神道の普及に尽力していた。一八七四年（明治七年）三月三十一日、近江国おうみの日吉神社ひよしの大宮司に任じられていた。

日吉神社は、近江国（滋賀県大津市）にあり、日吉大社とも言う。また全国の日吉神社、日枝神社など大山咋神おおよまぐいのかみを祀る山王神社まつさんの総本社であり、政府が定めた官幣大社かんぺい二十二社の一社という格式の高い神社である。

この大宮司という職務は、手練手管ろうを弄する政治的駆け引きを担

うより、純粹に天皇を中心とした国家を造らねばならないと考えていた吉輔に最もふさわしい仕事だと言えた。

また社格の最高位の官幣大社の神官最上位である大宮司職は、町人出身である吉輔にとって満足すべき出世だった。

実は、明治政府の宗教政策は政府樹立当初のものから大きく変化していた。

当初は、宗教を司る神祇官じんぎかんが、行政の中心である太政官たじょうかんよりも上位にあり、完全な祭政一致政権だった。

しかし、しばらくして神祇官が廃止され、神祇省、そして教部省と変遷する過程で神職は太政官の傘下に置かれるようになった。

形式上は西欧各国に倣いなら政教分離の方向となったのだが、実態は教部省を通じて国家神道を国の隅々にまで浸透させるのが狙いであった。国家の中心に神道を置く、すなわち天皇を中心とした国家神道で国民の精神面を統治しようという政策を遂行していたのだった。

吉輔は、教部省に所属し、大宮司という職務を担いながら神道を国民に浸透させるという役割を担っていた。

貞剛は、日吉神社に向かった。

鳥居を潜りくぐ、森閑しんかんとした森に囲まれた豪壮な社殿に迎えられると、自ずと身も心も引き締まる思いがする。

吉輔は、本殿の前で神官の正装で立っていた。

官の世界で立派に身を立てた愛弟子まなでしを迎えるにあたって、吉輔は余程嬉しかったのだろう、表情は崩れていた。

「ご無沙汰ぶさたしております」

貞剛は、深く頭を下げた。

「いえいえ、こちらこそ吉武よしたけのことでは世話になりました」

吉輔も低頭した。

実は、吉輔の養嗣子ようしし吉武は、近江国八幡で営んでいた肥料商、干鰯問屋かの家業が傾き、単身で蝦夷地えぞち（北海道）に渡り、貞剛の世話で函館裁判所に勤務していたのだが、一八七六年（明治九年）に享年ねん三十四という若さで急死してしまったのである。

「蝦夷地は寒うございます。私も先の妻を亡くしましたが、暮らすにはなかなか大変でございます。吉武さんには申し訳ないことをいたしました。残された奥様やご子息吉之輔さんのことは、私が責任をもってお世話したいと思えます」

貞剛は、吉武の遺族の世話を約したのである。

「本当にかたじけなく思っております。貞剛殿は、この度は大坂の裁判所に栄進されたとのこと、まことに喜ばしく思っております」

吉輔の言葉に貞剛は表情を曇らせた。

吉輔は、その変化を見逃さない。

「何か屈託くつたくがあるのですか」

貞剛は、真つすぐに吉輔を見つめた。

「実は、官を辞そうと考えております」

鎮守の森に鳥の声が響く。

吉輔は、沈黙したままじつと貞剛を見つめている。

「辞した後は、どうするか考えておりますが、叔父の幸平が住友に
来いと申しつけております。幸平が申しますには、住友でも国家
に尽くすことができると言うのです」

貞剛は、目を伏せた。

「官は、乱れておりますな。御一新で国を造った際の純粹さが失わ
れております。それに絶望されましたか」

吉輔の問いに、貞剛は顔を上げた。

「先生から法の支配が国を造ると教えられ、江藤先生にもお会いし
ました。素晴らしい方でした。ところが乱の首謀者として、法の裁
きも受けず、打ち首となり、その首を晒さらされるといふ無慈悲な、辱はずかし
めをお受けになりました。江藤先生のこれまでの貢献を考えれば、
納得できないことです。西郷先生も乱を起こされましたが、辱めを
受けることがないよう、その首は今も隠されております。政府の腐
敗に対する無念の思いで、その靈魂は今も漂われておられること
でしょう」

「確かに薩長、特に長州閥の腐敗は目に余ります。あなたが官に絶

望されるのも分かる気がします。私も同じ思いを抱き、この国が心を失わないように神道の普及に努めることにしたのです。貞剛殿がどのような道を選ばれようと、その道はこの国に貢献することでしょう。迷わず自分の道を進まればよい。信じる道を行かれない。道に志し、徳に拠り、仁に依り、芸に遊ぶと申します。貞剛殿が志された道を歩まれれば、必ずや悠々たる人生を全うされます」

吉輔は、『論語』の「述而第七」編にある「道に志し、徳に拠り、仁に依り、芸に遊ぶ」という言葉を示して貞剛の決断を後押しした。

この言葉は、孔子の理想像である。

道を志し、徳を極めれば、それは思いやりの仁となり、やがて芸を樂しめば、迷うことなく生きることができるといふ意味だろう。

芸に遊ぶとは、君子はいろいろな芸を身に付け、樂しむのが良いという解釈もあるが、貞剛には、迷わず自分の道を歩めば、まるで芸に遊ぶように楽しみながら道を違うことがないという、吉輔の激烈に思えた。

「私は、官の道を全うできませんでした。今度は実業界に身を投じようと思いますが、実業界は利益、すなわち金儲けが目的になります。そちらも私には向いているかどうか……」

貞剛は苦笑した。

「ははは」吉輔はおおらかに笑い、「ご心配は無用でしょう。住友は

その祖を仏教者でもある文殊院政友とします。元々は仏の道を広めるために商売をなされたと聞いております。それに、中国の『礼記』にある『報本反始』ほうほんはんしという考えを大切にされています。すなわち天地、祖先に感謝し、いつでも物事の最初、根本に思いを致すことを心がけた経営を為なされているそうです。ただ単に金を儲けるだけでは、これほど長く住友が続くわけがありません。安心して、ご自分の役割を果たされればよろしいでしょう」

貞剛は吉輔の言葉に勇気づけられ、迷いを振り払い住友に入社する決意を固めたのである。

吉輔は、貞剛が住友に入社した翌年、一八八〇年（明治十三年）に死去した。

それはまるで愛弟子貞剛が、住友という自分の道を見つけたことを見届け、安堵したかのような死だった。享年六十五。干鯛問屋という商家に生まれながら、尊王攘夷そのんのうじやういに奔走ほんそうした疾風怒濤しつぷうどとう、かつ自分の思い通りに生きた見事な人生であった。

2

住友は別子べつしの銅と共に生き、発展してきた。

別子や各地の銅山から大坂長堀（鰻谷うなぎだに）の本店にある、吹所ふきしよ、則すなわ

ち精鍊所に粗銅あらがねが集められ、そこで精鍊され、銀を含むものは南蛮吹きで銀が取り出される。これらは棹銅さわたう、丁銅、丸銅などの型銅に加工され、国内外に出荷されるのである。

この仕組みは、長く変わることなく続けられてきたのだが、幸平の尽力により、銅山経営を明治政府に接收されるという危機を乗り越えて以来、近代化が進められてきた。

フランス人の鉱山技術者レイ・ラロックを雇い入れ、別子銅山の近代化計画である銅山目論見書もくろみしよを作成させたり、彼の通訳であった塩野門之助しおのものすけをフランスに留学させたりしただけではない。

まず幸平は、住友本家の機能を三分割したのである。

本家には、当主一家の住まい、本店組織、そして吹所、則ち精鍊所としての機能があつた。

一つの場所に三つの機能が集中していることにはいろいろな不都合を覚えた幸平は、長堀鰻谷の本店を当主一家の住居だけにし、本店組織の機能は、水運の便が良い川口地区富島に移転した。

これは幸平の深謀遠慮しんぼうえんりよという一面もあつた。すなわち経営と資本を明確に分離するためには、当主の住居と経営の中心となる本店機能を分離した方がいいというわけだ。この考えは、幸平の頭の中だけに仕舞っていたが、当主友親は薄々感づいていた。しかし総理代人として経営を任せた以上、幸平のやることには口を挟まなかつた。

次に吹所、精錬所を別子銅山の北にある立川たつかわに移転することに決めた。ここは産銅の運送拠点である新居浜にいばまに近い。ここに精錬所を造れば、別子銅山から産出した銅を地元で精錬することができ、生産効率も高いと考えられたからだ。この立川精錬所は一八七六年（明治九年）に完成した。

このとき、鉱山経営の最大の課題に「水抜き」があった。間符まぶと言われる坑道は、地下数百メートルまで掘り下げる。そのためどうしても水が溜まってくるのだ。これを抜かねばさらに地下へと掘り進むことができない。

水引みずひきという排水を専門とする職人が、箱樋はこどいと呼ばれる木製のポンプを操作し、水樋すいひという樋で水をくみ上げる。

坑道の暗闇の中、螺旋らせんというサザエの貝殻かいがらに鯨油げいゆを入れ、それに燈心とうしんを挿し、火を点けただけのほのかな明るさの中での作業だ。

地下数百メートルの深さから、何人もの水引が地上に向かって数珠ずつなぎに連なっている。一人が箱樋を動かし、水を吸い上げ、一旦、貯水槽に溜める。そこに次の水引が水樋を差し入れ、箱樋を操作し、水をもう一段上の貯水槽に引き上げる。

こうして何十人もの水引が延々とつながることで地下の水を地上に運び、排水するのだ。気の遠くなるような作業である。しかしこれを怠ると坑道の掘削を進めることはできないし、坑夫たちの命おこた

かかわる事故が発生する。

これまでも別子銅山は突然の湧水に襲われ、坑夫が亡くなったり、掘削の中断を余儀なくされたりした。鉦山は水との闘いと言われる由縁ゆえんである。

宰平は、「水抜きができなければ我が鉦業は将来必ずや水のために廃業の不幸を免まぬかれざるなし」と言い、別子銅山から新居浜の反対側、東南の方向に流れる銅山川どうざんがわに坑道からの水を流す疎水そすいを造ることにした。

銅山川のこの辺りは、悪あしき谷の意味も込めて足谷川あしたにかわと呼ばれていた。

実は、この疎水こあしたに、小足谷疎水道は一六九九年（元禄十二年）に第一回目の着工が行われたが、あまりの困難さに中断、そして一七九二年（寛政四年）、約百年後に再開された。ところが一六六メートルで再び中断を余儀なくされた。

中断の理由は、農民からの強い反対だった。

銅山川は、四国山脈を流れ、徳島県阿波地方あわの吉野川へと流入している。吉野川流域は四国でも一大農地が広がっている。ここで農業を営む農民たちから、「銅山の鉦毒水を流されたらどれだけの被害が出るのか。中止せよ」との反対が広がったのである。

執念ともいえる約百年を経ての工事再開だったが、住友としては

またしても工事を中断せざるを得なかった。

しかし幸平は、水抜きなくしては銅山経営はできないとの強い信念で一八六九年（明治二年）に工事再開を決断した。これにはラロツクの提案の後押しもあった。

課題は、下流域の農民たちに鉱毒水の被害を及ぼさないことを約束しなければならなかった。

幸平は、職員を工部省に派遣し、鉱山からの水に含まれる鉱毒を取り除く方法を研究させ、イギリス人技師の指導を受け、鉱毒を沈殿させ、除去する収銅所を作った。

大きな沈殿槽を幾つも作って坑水を溜め、そこに鉄棒を投入することで溶けだした鉄と銅が反応し、沈殿し、沈殿銅となる。坑水に含まれた銅が沈殿することで鉱毒が取り除かれた上澄みの水を、疎水道を通じて銅山川に流すことができる。

この小足谷疎水道は、一八八四年（明治十七年）十一月十三日に完成するが、貞剛が住友に入社した頃には全長八六四メートルのうちの約八〇％が完成していた。

もう一つ、難工事を幸平は行っていた。牛車道の普請だ。

別子銅山が繁栄するにしたがって多くの人が働き、居住するようになった。常時居住する者は四千人以上で、日中人口は一万人を超えるようになっていた。

彼らに日々提供する食糧や日用品を別子銅山に運び込まねばならない。また産出し、粗く精錬した粗銅を港まで運ばねばならない。

別子銅山は海拔一二〇〇メートル以上の高地にあり、周囲も千数百メートルの山々に囲まれている。道は作られているが、平坦ではなく、山の斜面を縫う道は長く勾配こうばいもきつい。

この道を重い荷物を担いで行き来しているのは、仲持なかもちと言われる人々だ。彼らは背負子しよいちこという道具に男は四五キロ、女は三〇キロの荷物を背負う。

別子銅山の最初の坑道かんきこう歎喜坑が開坑したのは、一六九一年（元禄四年）のことである。

当初は、粗銅は新居浜の東にある土居町天満浦てんまから大坂に送られていた。当然、別子銅山への食糧などもここから運ばれていた。

この仲持道には、西条藩領さいじょうの立川銅山があるため、これらを避けるように赤石山系あかいしの東側を通ることを余儀なくされていた。

天満浦から浦山までの一二キロを牛車で運び、そこから一二〇〇メートルほどの高度にある小箱越えを経て別子銅山に至る二三キロを人力である仲持が歩く。仲持の人数は五百名から六百名ほどいたというが、運搬道を延々と仲持の列が続いたことだろう。

住友は、もつと近い道の開発を模索し、西条藩内を通過できるように交渉を続け、一七〇二年（元禄十五年）には別子銅山から雲ヶ

原、石ヶ山いしがさんじょう丈など赤石山系の西側を通り立川中宿に至る一二キロは仲持が運び、そこから新居浜までの六キロを牛車が運ぶようになった。

運搬道の距離が短縮され、別子銅山の業務の効率化が大きく進んだ。また新居浜から大坂へ粗銅を運ぶことができるようになり、住友はここに浜宿はまやどという口屋くちや（事務所）を開設し、粗銅搬出の事務や物資の集積地とした。これが契機で新居浜が住友の街として発展していくことになる。

その後も住友は仲持道の短縮化に努め、一七四九年（寛延二年）に西条藩内の立川銅山を吸収合併すると、別子銅山から海拔一二一九メートルもある銅山越と言われる峠を一気に越え、東平とうぼるを経て立川中宿に至る六キロを仲持、そこから新居浜口屋までの六キロを牛車が運ぶようになった。

当初の仲持道二三キロ、牛車道一二キロの計三五キロが、仲持道六キロ、牛車道六キロの計一二キロになり、約三分の一に短縮されたのだ。

しかし、運搬道は短縮されたが、仲持という人力に頼っていると、いう問題は解決されなかった。また運搬に数日かかることもあり、事故なども多発していた。住友にとってこの運搬の効率化は、最重要の経営課題だった。

幸平は、この問題にも取り組んだ。一八七五年（明治八年）に着工し、一八八〇年（明治十三年）には別子銅山から銅山越、石ヶ山丈、立川中宿、新居浜口屋の二八キロの牛車道を開設した。山中の急勾配を避けるため距離が長くなり、片道二日、往復四日を要する行程となったが、人力から牛車に変え、運搬する量は飛躍的に増大する一大改革だった。

幸平は使用する牛を故郷近江から取り寄せた。数十台の牛車がぎいぎいと車をきしらせる音は、別子の風物詩となった。

またこの牛車道の完成で途中の立川、石ヶ山丈などに宿場が形成され、銅山周辺の発展に寄与することにもなった。

もう一つ、別子銅山経営の近代化で幸平が行ったのは、初の洋式精錬所である高橋精錬所を一八七九年（明治十二年）に完成させたことだ。

別子銅山では、三工程で粗銅生産が行われる。木方と吹方に分かれ、粗銅が生産される。木方は焼鉦^{やき}、吹方は製銅を行う。

ここで別子銅山の生産工程を簡単に説明すると、まず坑夫が鉦石を掘り、それを負夫^{おいふ}が鋪^{しき}（坑内）から運び出す。それらを金場^{かなば}という選鉦場で碎女^{かなめ}という選鉦婦が銅の含有量、すなわち品位約八%以上の物を選び、それを約三センチ程度に細かく砕く。

これを焼窯^{やきがま}に入れる。薪^{まき}と砕いた鉦石を敷きならべ、三十日から

六十日間、蒸し焼きにして鉍石中の硫黄分を取り除く。これによつて銅、鉄、石英、少量の硫黄を含む焼鉍になる。ここまてが木方の作業であり、銅鉍石一三三〇キログラムと薪五三〇キログラムで焼鉍一〇〇〇キログラムが得られる。

次は吹方の作業に移る。焼鉍に珪砂けいしゃを混ぜ、吹床ふきどこと呼ばれる溶鉍炉に入れ、木炭で加熱、溶解する。吹床の中で鉄分は珪酸けいさんと化合して珪酸鉄となつて比重が軽いために浮き、炉の上部から流れ出る。これを鍛からみという。鉄分の多いカスである。

一方、銅分を多く含んだ硫化銅は炉の底に溜まる。これは水で冷却すると皮状に固まるので鉍かむと呼ばれる。鉍は、銅分を三五%から四〇%含む。

この鉍を吹大工が火箸で一枚一枚剥ぎ取る。あとには鍋尻なべじりという床尻銅とじりどうが残る。これは銅分が土中に沈殿したものだ。

鉍を再び珪砂と混ぜ、真吹炉まぶきろという二番吹きあらがねの工程に移る。木炭で加熱すると、硫黄分は亜硫酸ガスとして蒸散し、鉄分は、珪酸鉄となつて除去され、銅分九七%の粗銅、すなわち荒銅あらがねが得られる。

焼鉍四〇〇キログラムと木炭一〇〇キログラムから鉍一〇〇キログラムが得られ、鉍二八五キログラムと木炭二〇〇キログラムから荒銅一〇〇キログラムが得られる。

この方式を和式精錬と言う。

ここまでを別子銅山で行い、荒銅は新居浜から大坂鰻谷精錬所に送られていたが、幸平がそれを廃止して立川に精銅所を作ったため、そこで再び真吹炉にかけられ不純物を除かれ、純度九九%の精銅になる。銀を多く含む荒銅は南蛮吹きにかけられ、銀を取り除かれる。こうして出来た精銅は、輸出用の棹銅、国内向けの丸銅、角銅に加工鑄造され、大坂や神戸から各地に運ばれて行ったのである。

幸平は、東延とうえんちかくの足谷川沿いに一八七九年、荒吹炉二基、真吹炉一基の高橋精錬所を建設した。ここは従来の吹子ふいごではなく送風機を備えた洋式精錬所だった。

ところでここまでの説明でも分かるように、銅の精錬は大量の木材を消費する。また精錬過程で発生する亜硫酸ガスは木々を枯らす。そのため天然の原生林だった赤石山系の山々は、赤茶けた土がむき出しとなったはげ山になってしまった。この結果、山の保水力は失われ、度々、別子は土砂崩れなどの災害に襲われることになる。

さらに幸平は、一八七六年（明治九年）に東延斜坑の掘削に着工した。これこそロックの最大の提案だった。

日本の鉱山は従来、鉱脈にそって掘っていったため、不規則に曲がり、迷路のようになっていた。そのため水平のところは這はって進まねばならない。これでは非効率極まりない。

ヨーロッパの多くの鉱山は堅坑たてこうを掘り、堅坑を水平坑で繋ぎ、そ

ここにトロツコを走らせ、鉾石を運び出す方法を採用していた。この方法は排水や通風にも有効だった。

ラロックは、別子銅山の鉾脈を調査し、斜めに鉾脈が続いていることを発見し、東延の舗口（坑口）から斜めに斜坑を掘削することを幸平に提案した。幸平は、これを西洋人の手を借りずに日本人だけで開削し始めたのである。

このように貞剛が住友入りした際、幸平は別子の申し子から、別子と住友のナンバーワンの支配者となり、次々と近代化施策を進めていた。

貞剛が、別子銅山の経営に口を挟む余地などなかったのである。

3

「貞剛、期待しているぞ。私の補佐を務めてくれ。住友は私がいる限り安泰だ」

総理代人室で幸平は部屋に響くほどの大声で言った。

「はい、どれほどの力になれるかは分かりませんが、住友のことをよく学び、務めさせていただきたいと思えます」

貞剛は、叔父とは言え、自分の雇い主である幸平に丁寧な頭を下げた。

「あまり堅苦しく考えなくともよい。叔父、甥の関係でもある。『命に逆らいて君を利する、これを忠と言う』という言葉を知っているだろう」

「はい、存じ上げております」

——逆命利君、謂之忠。中国の古典、『説苑』せいえんに出てくる言葉だ。

上司や主君の命令であつても、あるいは国家の命令であつても、それが主家や国家のためにならなければ逆らうことが本当の忠であるという意味だ。

その反対は、「従命病君、為之諛」（命に従いて君を病ましむる。これをへつらいとなす）である。

「私はこれを信条としている。実は、孫子そんしも同じように戦場で戦う将帥は、『君命に受けざるところあり』しようすいと言っている。君主の命令に唯々いいたくたく諾々と従っていたら戦に負けるといふことだよ」

「私も裁判所ではそのような考えで勤務しておりました。なかなか難しいことです。自分の欲得を考えていればできることではありませんせん」

貞剛は、裁判所勤務時代に大木司法卿に直言したことなどを思い出していた。

「貞剛の言う通りだ。実は、私は当主……今は家長と呼んでいるが、その家長に命懸けで諫言かんげんしたことがあるんだ」

幸平は、苦笑とも苦痛とも表現し難い表情になった。

「穏やかではありませんね」

貞剛は柔らかに微笑んだ。

「私は現在の友親様まで四代の当主にお仕えしているのだが、皆さま、どういうわけか酒好きであり、ご趣味に興じる方々ばかりである。かつて住友家が幕府の銅座に支払う金がなくなってしまつて、すわ、倒産かという事態になって初めて仕事に少し身を入れられた友視様ともみのような方もおられたがな」

幸平は、昔を思い出したのか、目を細める。

貞剛は、無言でじつと耳を傾ける。

「先代の友訓様ともりのりには家業に精を出してほしいと文ふみを送つたこともある。そして我が住友の最大の危機にも家長友親様は的確な判断をされなかった。明治の新しい時代になつた頃のことだ。銅会所の小山雄右衛門という者がやってきて、たかだか十万両で別子銅山を売らんかという話を持ってきた。たかだか十万両だぞ」

幸平は怒りに顔を赤らめた。「その頃、住友は借金で苦勞をしていたんだ。毎日、本店の重役は金策に走り回っていた。友親様はそれを知っていても見て見ぬ振りだった。それでこの際、これほど金策に苦勞するなら別子銅山を売つてしまおうという考えに傾かれたのだよ。馬鹿なことだ」

幸平の話に力がこもり始めた。体がいくらか震えているように見える。最大の危機のことを思い出して体の中から興奮し始めているのだろう。

「叔父さん、いえ総理代人がそれを阻止されたのですね」

「叔父さんでいい。今日はな」幸平がじろりと目を剥いた。「私は友親様に諫言した。まさに逆命利君が忠義の道だと思つてな。誠まことになつてもいいと思つた。命を懸けた。——友親様、住友は別子銅山のお陰で百八十年近くやつてこれているのです。唯一無比の財産であります。それをたかだか十両で売ってしまうなどということは承服できません。別子銅山がなくなつたら住友はただの賃吹屋になつてしまいます。五千人以上のお山で働く者たちを如何いかなされるおつもりですか、とな」

「友親様はどうなされたのですか？」

「ええようにせえ、と言われて奥に引つ込んでしまわれたわ。呆あきれたもんやつた。それからなんとか協議に協議を重ねて、どうにか売却を阻止したのだ」

一八七六年(明治九年)には幸平は住友家の当主を家長に改称し、また同年八月には「本家第一之規則」十か条を定め、友親の名前で発布した。

その第二条で「予州(伊予国愛媛県)別子銅山の鉱業は重大に

て、万世不朽我所有する不動産にて他に比すなく、後来の利害得失を謀り、勉励指揮すること」と規定した。

よもやこれからどのような事態が起きようとも別子銅山こそが住友であり、売却などもつてのほかであると謳^{うた}つたのだ。これこそが幸平の思いだった。

住友家ではなく、別子銅山こそが万世不朽であると強調したのだ。

「大変な時代をよく切り抜けられましたね」

貞剛は、幸平の胆力に感心した。とても自分の比ではない。

「とにかく友親様は趣味人でおられてな。事業より茶道具に凝^こられて、ほとほと困っている。とにかく私が総理代人になった以上は、儉約もしていただき、経営には一切、関与させない。それが住友を安泰にさせる道だ。家長はシャツポでいいのだ」

幸平は強く言いきった。

シャツポとは、帽子のこと。幸平は、家長は、幸平の頭の上にもよこんと乗る飾りでよいというのだ。

「シャツポですか」

貞剛は、呆れる気持ちになった。この考えは、住友という家の存続に苦勞している幸平の立場を考えれば理解できないことではない。

しかし貞剛は違和感を禁じ得なかった。十代の頃より、天皇を中心とした国を造らねばならないと尊王を掲げて命を懸けて奔走して

きた。京で朝廷を護り、函館の裁判官にもなった。これらのことは全て天皇を中心に、法が支配する、人々が安心して暮らすことができる国を造らんがためだった。

ありていに言えば、天皇が宣言された五箇条の御誓文ごせいもんの精神を実現しようとするものだった。

住友にとって天皇の位置にあるのは家長だ。これをただの飾りとは……。国家で言えば、天皇をただの飾りにするようなものだろうか。

明治政府の重鎮たちはどのように考えているかは分からないが、貞剛のように実際の場で国造りに命を懸けた者にとって天皇は唯一無二の存在だった。

——品川殿しながわは、どう考えておられるかな。

錦の御旗みはたを考案した品川弥二郎やじろうのことを思い浮かべた。

品川は、ドイツ留学から一八七六年（明治九年）に帰国し、内務省官僚になり、国の本は農業にありとの考え方を強くし、農政分野で活躍していた。

「住友の家を強くするには、近代的な経営をする必要がある。かの石田梅岩ばいがんでさえ、家長がその任に堪えぬときは押込隠居させ、番頭が経営すべしと言っているではないか。江戸時代でさえ、そういう考えがあったのだ。だから私は『本家第一之規則』の第十条におい

て『嫡子ちやくしの者、不学にて家政を体認せず、放逸に過る時は、嫡子たるの権を奪い、次男、次女にても相続すること』と規定したのだ」

幸平は、自分が行って来た住友の改革について唾つばを飛ばさんばかりに熱く語った。

貞剛という自慢の甥いなかに、如何に自分が住友に貢献してきたか理解してもらい、もしも自分の後を継ぐだけの力量があれば、その際には改革を忘れるなどでも言いたげだった。

それにしても住友家の嫡子ふさわが家長に相応しくない時は、辞めさせても良いと定めるとは、なんとという激越さだろうか。貞剛は驚きを禁じ得なかった。

——とても真似できるものではない。

貞剛は、幸平の住友家改革を十分に支えることができるか、幸平について行けるか、やや不安を覚えなくてもなかった。

「私が叔父さんの期待に応えられるかどうか、ちと心配です」

貞剛は寂しそうに口角くまがを歪めた。

「私は、貞剛が入社してくれたことが何よりもうれしい。これがどれだけ住友に貢献することか、気が付いているか？」

幸平が、燃えるような目で貞剛を見つめる。

「叔父さんの改革は政府以上です。政府も当初は改革に燃えておりましたが、いつの間にか停滞、墮落だらくしてしまいました。内部では政

府の私物化とでも言うべき汚職が蔓延まんえんしています。官僚たちの獵官運動も目に余ります。正直に申し上げると、そうした状況に嫌気がさしたことが官を辞するきっかけとなりました。自分の理想と、目の前の現実との齟齬そごに苦しんだ結果です。官で自分の理想を実現できなかつた自分が真に住友の役に立つのかどうか……心もとない限りであります」

貞剛は静かに言った。

「本当に貞剛は真面目だのう。姉上とそっくりであるな」幸平は陽気に笑う。「大坂上等裁判所の判事にまで昇進した貞剛が入社してくれたことで、住友の人材が大きく変わることになるんだ。私はほとんど貞剛のように官で活躍した人材を入社させようと思っている。

我が住友では、『子抱こがえ』と言って私のように『子供』と言われる幼い頃から奉公に出て、やがて年功で『仲間ちゆうげん』『小者こもの』という手代に昇進していくことになっている。奉公人の心得では年功ばかりではなく能力も重視することにはなっている。また最も評価の対象になるのは主人に対する忠誠心ではあるがな。私のように諫言ばかりしている者は、いくら逆命利君といえども煙たい存在じゃ。ははは」幸平は大きく口を開けて笑った。「しかし私はこの『子抱』制度を廃止したんだ。それは知っておろう」

「はい。存じ上げております」

幸平は一八七三年（明治六年）三月に、別子銅山において月給・等級制、能力主義を採用した。これを契機にして一八七五年（明治八年）には「子抱」制度を廃止した。幸平の考えは、能力の有無は子供の時に見極めるのは難しい。ただ家長にへつらうのみで無能頑むのうがん愚ぐな者を増やす可能性が高いというのだった。

「鼻汁垂れも次第送り」という言葉がある。年功でのみ昇進していく「次第送り」を皮肉ったものだ。この仕組みを打破することが幸平の強い望みだった。年功で出世した無能な重役に仕えた苦勞に、ほとほと嫌気がさしていたのだろう。

そしてまるでとどめを刺すように、幸平は総理代人に就任した一八七七年（明治十年）に「老朽淘汰、下級店員の拔擢ばってき、新人物の重用」という人事方針を打ち立てた。

「私は、『今日文明開化の域に至り、無能頑愚の者、上等に座し、その権を振るい候わ謂いれ、これ無き候事』と重役を前に言ってやった。皆、目を白黒させておつたわ。住友を發展させるためには『仲間・小者』からも拔擢する、出来ない奴は落とす、外部から貞剛のような人材を連れてくる、これくらい大胆に人事を動かさねば、住友の發展はない」

幸平が次々と打ち出す改革に動揺し、戸惑う重役たちの姿が貞剛の目に浮かんだ。

「まさに五箇条の御誓文にあります『官武一途庶民に至るまで各其の志を遂げ人心をして倦まざらしめん事を要す』ですね」

「その通りだ。人事の停滞が住友の発展を阻害する。だから貞剛の入社を知って、我も我もと有為な人材が住友に押し寄せてもらいたいのだ。貞剛も良い人材がいたら、どんどん連れてきてもらいたい」

貞剛は、宰平の自分への期待をひしひしと感じながらも別の思いにふけていた。

自分はまだ住友でなんの実績もない。社員たちは、自分にどれだけ実力があるかと、お手並み拝見という態度をとるだろう。

いきなり本店支配人になったことも嫉妬しつとされるに違いない。今や絶対権力者になった宰平の甥という縁故がなければ、この地位を与えられることはない。

——謙虚でなければならぬ。

貞剛は、声にならない声で再び自分に言い聞かせた。

「貞剛には本店支配人になってもらう。私の補佐として全住友の経営を引き受けてもらう。ただし別子銅山など本業については私がいるから煩わずらわせることはないだろう。貞剛には財界活動を手伝ってもらいたい」

「財界活動ですか？」

「そうだ。今、私は大坂の経済界からいろいろな頼みごとをされて、

それに時間を割かれて、住友の経営に専念できない。例えば大坂商
法会議所や大坂株式取引所の設立に忙殺されている。それぞれ副会
頭などに就任しているんだよ」

幸平は、さも嬉しそうに指を折った。住友での地位を盤石ばんじやくにした
ため、外での活動に時間を割けるようになったことが自慢なのだ。

別子銅山に九歳で入って以来、よくどこまで成り上がってきた
ものだという感慨深い思いなのだ。

「分かりました。務めさせていただきます」

貞剛いんごんは慇懃いんごんに頭を下げた。

幸平は、住友の経営を近代化するために改革を大胆に進めている。
これは住友に長年奉職している幸平だから可能なことだ。

住友のことは幸平に任せればよい。自分はじっくりと幸平の仕事
振りを眺めておこう。とりあえず幸平から求められることを着実に
こなしていくことだ。

ふいに心が総理代人室を離れ、吉輔に乞われて京へ旅立った二十
二歳の頃へと飛んだ。

母田鶴たづの見送りを、心を鬼にして振り切った。もしかしたら二度
と母に会えないかと思うと涙が止まらなかつた。それでも国造りに
命を懸けねばならないと思った。

——あれから十年か。

自分は官では挫折ざせつした身だ。そのことをしっかりと自覚せねばならない。その上で青年の頃の理想を今一度、取り戻し、それを果たさねばならないと思う。

自分の理想とは、なんであったか。それは全ての人が法の下に平等で平穩に暮らせる社会を造ることだ。それは自らも、そして社会にも「仁」を根付かせることだろう。「仁」すなわち他者いづくへの慈しみ、それこそが自分に課せられた職務というものだろう。

貞剛は、官での暮らしからも分かるように、自分は他人を押しつけて出世や名誉、金銭欲を追求する人間ではないと理解していた。そのようなものに価値を見出さない。職を通じて、自分の人間性を高める方に価値を見出す人間なのだ。

—— 宰平は住友という社会を変えていく。そこには軋轢あつれきも確執も起きるだろう。自分はそれらを「仁」で平らかにしていく。そして理想社会を住友に築いていく。それが期待される役割かもしれない。「なにをぼんやりしている。官と商人は天と地ほどの違いがある。戸惑うこともあるだろうが、好きに思い通りやってくれ。貞剛の後ろには私が控えているからな。とは言うものの私に非があれば容赦ようしやなく諫言してくれ。逆命利君、これを忠と言うだからな」

宰平は剛毅こういに笑みを浮かべた。

「承知しました」

貞剛も笑みを浮かべた。

「とりあえず、すぐに友親様と別子銅山を視察してきてくれ。祖業がどんなものか、その目で見て来てくれ」

宰平は命じた。

貞剛は、早速の別子銅山行きに心を弾ませた。そしてそれが家長友親に同行する形であることも嬉しく思った。友親と同行することでその信頼を勝ち得るようにとの宰平の配慮に感謝したのだった。

4

貞剛は、住友が用意した汽船で尾道港おのみちを出港し、瀬戸内海を新居浜まで航海する。

汽船を接岸するのは新居浜の沖合にある御代島みよじまだ。新居浜は遠浅で汽船が接岸できないため、住友が御代島に港を作った。ここからは舢はしけに乗り、新居浜へ行く。

「伊庭さんいば、デッキに出てみましょうか。四国の山が見えますよ」
家長友親が親し気に話しかける。

十二代住友家家長だ。すらりとした細身で、なで肩の体つきは上品な印象を与える。顔つきもつるりとしたうりざね顔で額が広く、鼻筋もきれいに通っている。

——幸平叔父とはえらい違いだ。

顎の張った顔立ちで太い眉の下に鋭い目を光らせ、髭を蓄えた幸平の顔を思い浮かべておかしくなった。この優し気な顔立ちでは幸平に対抗することはできないだろうと思っただからだ。

貞剛は、友親に誘われるままデッキに出た。

「あれが四国山脈です」

友親が指を差した。

「おお」貞剛は感嘆の声を発した。驚くほど山が近い。海岸からまるで屏風でも立てたかのように一気に高い峰が連なっている。

「赤石山、黒森山、笹ヶ峰……。どれもこれも一六〇〇メートルから一八〇〇メートルの山々です。あの向こうにも一〇〇〇メートル級の山々が幾重にも重なって連なっているのです」

友親は懐かしいものでも見るように目を細める。

「こんなに山が高く、かつ近いと思いませんでした」

汽船が近づくにつれ、山々が貞剛に覆いかぶさるように迫ってくる。あの山の頂き近くに別子銅山があるかと思うと、その峻険さに身が縮む思いがする。

「うちにはタヌキがいましたね」

友親が愉快そうに言う。

「タヌキですか？」

つられて貞剛も微笑む。友親の笑みにはなんの邪気もない。住友という名家の血筋の良さが表情に表れている。

「別子のお山を見つけたのは四代友芳の時です。その時、備中吉岡銅山の支配方として勤務していた、田向重右衛門たむけじゆう えもんというのがいましたね。田向の配下の切り上がりの長兵衛という坑夫が、別子に銅の露頭があるとの情報をもたらしたのです。それで田向は長兵衛と密かに伊予いよに渡り、あそこに見える」友親は山々を指さした。「千数百メートルの深山の道なき道を命懸けで探索して、大鉱脈を発見したのです。重右衛門の子孫は、田向、すなわちタヌキと親しみを込めて呼ばれて、今も住友の大功労者として処遇しているのです。もう一人はイズカンと申しましてね」友親は視線を貞剛に移した。

貞剛は、静かに友親の言葉を待った。

「元禄七年（一六九四年）四月のことです。杉本勘七かんしちという者が初代別子銅山支配方をしている時でしたが、今は一緒にになりましたが近くにあった西条藩の立川銅山から坑夫たちが暴徒となって突然、襲ってきて、別子銅山に火を放ったのです。折からの強風にあおられて火はたちまち燃え広がりました。立川銅山とはなにかと対立していたのですが、まさかこんな大騒動になるとは……」友親は表情を曇らせた。「勘七は部下を指揮して暴徒と戦うとともに、消火にも獅子奮迅ししふんじんの働きをしたのですが、遂に力尽き、炎に焼かれてしまい

ました。この事件で百三十二人もの貴重な人材を失ったのです。杉本勘七には、住友家の祖・蘇我理右衛門が用いた泉屋の屋号を与えましてね、それでイズカンと言うのです」

「ではイズカン様のご子孫も厚遇されているわけですね」

「はい、イズカンの子孫も大事にしております。また亡くなった者たちは蘭塔場らんとうばという墓所を設けて毎年お盆にはお参りしているんです。タヌキといい、イズカンといい、そして多くの坑夫やその家族たちの血と汗が別子のお山にはしみ込んでいますよ。本当にありがたいことで感謝してもしきれません」友親は手を合わせ、山々に向かって目礼した。

貞剛も友親に倣ならって手を合わせた。友親は、幸平から相当な圧力をかけられているらしいが、純粹で正直な人物のようだ。

——この人をお守りするのも重要な職務だ。

「そろそろ御代島に横着けになります。これからは大変な山道ですから覚悟してください」

友親はまるで子供が悪戯いたずらを企んでいるような笑みを浮かべた。

貞剛は、新居浜口屋から駕籠かごで立川出張所に向かった。

立川出張所は、新居浜口屋と別子銅山との物資運搬の中継基地の宿場町として賑わっていた。生活物資などを保管する蔵も多く立ち並び、また立川精錬所があり、精銅方、会計方、運輸方など多くの社員が働いていた。

荷物を運ぶ仲持など運送に携わる人や住友の社員たちのための宿泊施設、遊興施設、食堂などもあり、一つの街を作っていた。

「ここには『せつとう節』という流れの坑夫の歌があるんです。せつとうというのは、石頭と書き、ハンマーのことです。十四番まであるんですが、今から渡るあの眼鏡橋を歌ったものがあるんです。ご披露しましょうか」

友親が言う。

「お願いします」

貞剛は頼んだ。友親は家長という立場にあり、意味では雲上人なのだが、市井のことにも関心があるのだろうか。

「アー行こうか戻ろうか銅山山へ、ここは思案の眼鏡橋……」

友親はやや高い透き通った声で歌う。

貞剛は、川にかかる眼鏡橋を眺めた。花崗岩で作られた二つのアーチを持つ美しい橋だ。堅牢に作られているため不朽橋と呼ばれている。

「お山へ行くのが辛いという意味でしょうか？」

貞剛が聞く。

「立川には遊ぶところもありますからね。あの眼鏡橋を渡ったら辛い鉾山仕事が続っているのですから、思案のしどころです。ははは。

私たちはどうしますか？」

友親がにんまりとする。

貞剛は、別子銅山視察に来てよかったと思った。友親と距離が近くなってきた気がするのだ。

「行きましょうか」

貞剛が快活に答える。歩き出そうと一歩足を踏み出した。改めて顔を上げると、目の前に山々がまるで何重にも折り重なった壁のように迫ってくる。箱根の山が尻尾を巻いて逃げ出すほどの険しさだ。果たして登り切ることができるだろうか。

「駕籠に乗ってください。この坂はあなたや私の足では太刀打ちできませんからね」

友親はさつさと駕籠に乗り込んだ。

駕籠は四人の駕籠かき、早夫が担ぐ。貞剛は躊躇した。急坂を、自分に乗せて駕籠が登るのだ。こんな贅沢、傲慢さが許されていいのだろうか。

「支配人、早く乗ってください」

早夫がせかす。

「伊庭さん、出発しますよ」

先頭の駕籠から友親の声が聞こえる。貞剛は、その掛け声に押されるように駕籠に乗り込んだ。

貞剛が座ると、駕籠がぐいっと浮いた。昇夫が威勢の良い声をかける。駕籠が動き出した。

貞剛は不覚にも涙が込み上げてきて、袖で拭ぬぐった。

——申し訳ない。

駕籠に乗ることができるのは支配人以上の特権らしい。

昇夫の労苦を想い、その特権を利用していることへの申し訳なさと、本店支配人という地位を与えてくれた宰平と友親への感謝の思いが涙となったのである。

まさかこの時から十数年後、この急坂を毎日、歩いて登ることになろうとは、思いもよらなかった。

〈つづく〉